教育課程実践モデル事業 EAST通信 第29号（H31.1.15）松江東高等学校

【２学期授業評価アンケートの結果について】

今年度から大きくアンケート項目を変更した授業評価アンケートの２学期の結果が出ました。１学期実施分との比較が出来る点で、カリキュラム・マネジメントの上でも重要なデータとなると思われます。

授業評価アンケートの内容は、「生徒による自己評価」と「授業評価」に大別されます。今回は、このうち、「授業評価」の質問項目の一部を取り上げて、その変化に注目してみたいと思います。

質問②「授業の中で、自分の考えや意見を表現する機会がある。（ペア、グループ活動や板書を含む）
質問⑤「授業担当教員から学習や思考が深まるような問いかけがある。」

＊ここで例示した各教科・科目は学年を複数で担当しています。また、すべての科目の平均でなく、一部科目の結果です。

※満点は５	質問②			質問⑤		
教　科	１学期	２学期	増減	１学期	２学期	増減
２年国語	４．７９	４．６９	－０．１０	４．３１	４．２５	－０．０６
２年地歴	３．８１	４．２１	＋０．３１	４．１８	４．２９	＋０．１１
３年地歴	３．１３	４．１６	＋１．０３	４．０３	４．３８	＋０．３６
２年数学	２．６５	３．７０	＋１．０５	３．５０	３．８４	＋０．３５
１年理科	４．８２	４．７６	－０．０６	４．２６	４．４１	＋０．１５
３年理科	３．８３	４．７３	＋０．９０	４．３３	４．３３	＋０．１１
２年英語	４．４７	４．５１	＋０．０４	３．９４	４．１１	＋０．１７

すべてを詳細に分析することはできていませんが、全体的に１学期に比べ数値が低下しているものは、ほとんどが１学期の数値が高い教科（科目）でした。１学期低かった教科（科目）も、多くが２学期には数値が高まっていました。要因としては、１学期の授業評価アンケートの結果を受けた授業改善を各先生方が意識してされたこと、２学期の公開授業週間に全教員が必ずＡＬ型の授業をすることにしたこと、さらには２学期後半に全教室及び特別教室に導入された ICT 機器を積極的に先生方が使うようになったことなどがあると思われます。

松江東高校では、現在授業担当者の個票が未完成で、また、すべての教科を横断的に比較するシステムも未開発です。各教科及び担当者にその分析を任せているのが現状です。次年度はこれを課題として改良して、カリキュラム・マネジメントをより機能させることができればと考えています。

【浜田教育センターからカリキュラム・マネジメントに関する聞き取りがありました】

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現に向けた具体的方策について聞き取り調査を行い、情報収集・整理を行うことを目的とされた、浜田教育センターからの聞き取り調査が昨年12月18日にありました。

今回、無理を言ってその復命書(以下に改編・抜粋して掲載)を拝見させていただきました。客観的に見て、どのような部分がカリキュラム・マネジメントとして有効と感じられたのか探ってみることで、教育課程実践モデル事業の成果と課題をまとめる際の参考にしたいと思います。

松江東高校は、県の教育課程実践モデル事業の指定校である。その取組を中心に聞き取りをお願いした。松江市内普通科三校の通学区撤廃や学級数減、単位制導入などの動きに伴い、カリキュラムの大改編や魅力化に取り組んでいるということであった。総合的な探究の時間の体系化やEAST 国際交流などの新科目創設を中心とした東高校ブランドの構築は、今後の生徒募集等に関わる大きな取組となることから、島根大学や地域、卒業生の協力も得ながら進めておられた。松江東高の使命を管理職が見極めて示すことが大変重要であることを感じた。また、地域の中での存在感を示すことが、生徒の学びの意欲や質を高めることにつながっていくことから、学校の発信力もカリキュラム・マネジメントの上ではポイントとなっていた。

①学校教育目標

- ●これまで造り上げてきた東高の教育方針・目指す学校像を継承しながら、今年度の教育目標として３つの力の育成・重点目標と具体策をまとめ、グランドデザインとして示している。これは、教職員の旗印となっているとともに、（受験前も含め）生徒・保護者へのメッセージにもなっている。
- ●本事業で育てたい生徒像については、グランドデザイン作成時に全教職員でワークショップを行い協議して作成した育てたい生徒像をベースとして、あらたに作成。それを、成果指標とする昨年度のアンケート及び授業評価アンケートにも反映させた。
- ●EAST国際交流をはじめとするいつくかの新科目の創設は、松江東高の核の一つとなる取組である。この取組を基にしてカリキュラムを作ったり、授業改善を行ったりしている。

②PDCAサイクル

- ●AL型の授業を全員が公開。指導案を書くことでAL型の授業について考える機会となる。
- ●生徒による授業評価アンケートを行っている。これまでは「板書は見やすいか」などスキルを問う質問が多かったが、「自分の考えや意見を表現する機会があるか」など目指す授業に合わせた質問に改編した。厳しい評価も出てくるが、授業改善につながっている。また、生徒にも「自分の考えを根拠を明らかにして伝えることができるか」など、目指す姿について質問している。
- ●学校評価アンケートは、教員と生徒、保護者の意識のずれを見つけることを重視するため、内容や方法を今年度大きく改編した。また、各分掌の重点目標と連動させるようにしている。
- ●評価方法が変われば授業も変わるとし、今年度は学習評価の大幅改善にも取り組んだ。

③チーム力
●研究担当者会が中心になり企画・提言をしている。前年度スタート時には、職員室で話し合いをするなどして、先生方を巻き込んで行くようにしていた。
●共通の研究ファイルを全員に配付し、研究に関するプリントを綴じてもらうことで協働意識を高めている。
●EAST通信を月に１回以上発行し、研究内容や研修会への参加報告などを載せている。職員数が多い中、共通理解を図る上で重要な発信源となっている。保護者へはHPで伝え、外部には教育委員会のEIOSなどで発信している。
④外部との連携
●講義形式の研修だけなく、大学の教官による提案授業などを実施することで実践力を高めた。
●校長が様々な会合に出掛けるなど外部との関係づくりを行う中で、松江東高の魅力化や今後の方向性などを説明し、協力を得ている。
●高校卒業までに、地域の課題を解決するなどの活動を通して地域とのつながりが強くなると、地元に帰ってくる割合が高くなる。そういった視点で地元企業に協力との連携を考えている。
●通学区撤廃に伴う三校の特色化が10月に示されたのに伴い、どのような特色化を図っていくか、教育課程実践モデル事業の運営委員会とは別に、プロジェクトチームとして「松江東高等学校魅力化組織（略称EEE）」を２学期立ち上げた。週１回話し合いを行い、運営委員会等に提言をしている。
⑤その他
●ICTの整備が進み、授業改善につながっている。
●外からの刺激や情報が、変化を生むことから、カリキュラム・マネジメントの肝は外部資源の活用といえる。そのためには、管理職のフットワークのよさが大切となる。
●保守的になりがちな先生方の意識改革も課題である。授業改善を中心とした教科会の充実やそれを運営するミドルリーダーの育成が重要となってくる。

【松江支部教頭・副校長会の研修会を兼ねて、南口教諭の研究授業を行いました】

１月10日、県教頭・副校長会の松江支部総会に合わせて、初任者研修の一環として、本校初任者の南口教諭が１年生の理科（生物基礎）で研究授業及び授業研究を行いました。松江地区の15名の教頭先生方に参加いただき、ご意見等いただきました。

南口教諭の授業は、「最初に題材の簡単な説明（講義）→その後生徒同士が学び合いをしながら与えられた問いについて答えを作成→最後の５分間で授業の振り返りを各自が書く」という展開が特徴です。書かせた生徒の振り返りの記述で全体シェアすべき内容については、すべてプリントにまとめられます。南口教諭はそれぞれの生徒の記述にコメントをつけて次の授業で生徒に配布されています。そのプリントを毎時間作成して生徒の学びを深め主体性を育てている点や、提案性のある授業を初任者がされているということを教頭先生方から評価していただきました。

南口教諭は、授業で大切にしたいこととして、指導案に次のことを記載されていました。

「本授業の年間を通した大きな目標は、生徒同士が協働して課題に取り組むことによって、多様な価値観を受け入れる力・他者と協働する力・主体的に課題解決に向かう力を育てることである。そのために、生徒同士の「対話を中心とした学び合い」によって授業を展開している。この活動を通して、理解の早い生徒が理解の難しい生徒に説明をし、お互いの理解の深まりを感じさせたい。このような活動における授業者の立場として、最も重要だと考えていることは、理解が難しい生徒が「わからないから教えて」と遠慮無く助けを求めることができる環境作りであると考えている。そのため、生徒からの質問には「答える」のではなく、できるかぎり「問い返す」ことで生徒同士の協働によって課題を解決するように促すことを心がける。」

研究授業には、島根大学の泉雄二郎教授にも来ていただき、「生徒がまっすぐ学びに向かっている姿が素晴らしい。持ち駒（最初の説明で得た新知識と既習の知識）と他者の協働性から答えを考えさせるのは良い構成であった。」とお褒めの言葉をいただきました。また、「生徒に投げかける問いの質が決定的に重要な授業方法である。教科（今回の場合は生物）におけるものの見方や考え方の本質に迫るには、何を問いかけるかをしっかり検討する教材研究が必要である。」との指導・助言もいただきました。

授業研究で出た教頭先生方の意見や質問の一部を紹介します。「→」は南口教諭の回答部分です。

●授業での生徒間の人間関係ができていて素晴らしい。つかみ（導入）を大切にすると良い。例示したり動画をみせて引き込むのが大事。そこで生活との関連が示せれば、生徒は興味を持って授業に臨む。
●全体で学びを発表（シェア）する場はないのか。
→あらためて全体でする必要はないと考える。活動時間でその目的は補償されていると思っている。
●学び合ったことのまとめ（答えの発表）がなかったが、どうするのか。
→答え合わせをすると答えを待つようになる。他者に協力を仰いでも自身で完結しないと自分が困るようにして学習意欲を向上させ主体性を喚起しようというねらいがある。
●このような学び合いの授業が軌道に乗ったのはいつ頃か。
→軌道に乗るまでに３カ月はかかった。そこまでが我慢、工夫のしどころである。
●協働の理想はランダムな人間関係である。多少固定的なところはないか。一人でプリントに向かっている子もいて気になった。
→対話的であるということは、人との対話だけでなく、教科書やプリントとの対話、自分との対話も含むと考えている。一人の子がいれば、その対話をしているか声かけをするようにしている。一人の子もいたが、その子は人との対話が苦手な子。だから、早く終わらせると人が頼ってきて対話ができるのを期待している。本時間では、最後には困っているグループに自分から飛び込んで行った。
→グループを教師が作らないようしている。教師が作ると協働でなく、強制になってしまうと思うからしないことにしている。
●ルーブリックがなかった。経験からくる思い込みで評価をしてないか。振り返り（内省）が大事であるから、そのあたりはしっかりとやるべきはないか。